

# 経済為替ニュース

SUMITOMO MITSUI TRUST BANK, LIMITED FX NEWS

第2371号 2017年08月14日（月曜日）

## 《 North Korea situation rattles market and world economy 》

北朝鮮の核・ミサイル開発を巡る米朝間の危機が遂にマーケットまで動かし始めたので、今週はこの問題を取り上げる。生じたのは円高や株安。今まで北朝鮮情勢を無視していたマーケットが動揺しているのには理由がある。また北朝鮮を巡る情勢が広く国際経済全般にまで影響を及ぼす可能性もある。日曜日の日経朝刊は「米大統領 対中調査指示へ」と報じ「通商法 301 条で制裁も視野」と伝えている。

先週のマーケットでは、ドル・円相場は一時 108 円台の後半を付けたし、日本を含め世界の株式市場では株価が先週大きく下げる場面があった。連日高値を更新していたニューヨークのダウ工業株 30 週平均は、先週半ばに大きく下落。金曜日に小反発を試みたものの、北朝鮮情勢故に僅かな反発にとどまり、先週一週間ではこのところなかった大幅な下げを記録した。日本を初め世界の株式市場も警戒感を露わにしている。

108 円台の円相場示現の背景には、11 日朝に発表された米消費者物価指数（CPI）が前月比 0.1%の上昇にとどまり、予想の 0.2%を下回ったこと、また対前年同月比でも 1.7%上昇と市場予想を下回ったのも要因。連邦準備理事会（FRB）が利上げに動きにくくなったとの見方が広がり米 10 年債利回りは 2.191%に低下。日米金利差の縮小を見込んだ円買い・ドル売りがかさんだ。

しかし北朝鮮情勢の緊迫化を受けてリスク回避目的の円買いも入っており、ニューヨーク株の金曜日の反発も小幅だった。投資家の間に「この週末にも何かあるかも知れない」との警戒感があったためだ。

マーケットが動揺しているのは「事態が制御を失いつつあるのではないか」と思わざるを得ない面があるためだ。まずは言葉の応酬とその先鋭化。この原稿を書いている直前のトランプ大統領の発言は「Locked and Loaded」（狙いを定め、弾を込めた）だ。銃を構えたジョン・ウエインの台詞を思い出すが、それは「世界が今まで見たこともない fire and fury」（火炎と怒り 核攻撃を示唆）や「北朝鮮はもしグアムに何かするなら、極めて、極めて神経質になるべきだ」などに続く言葉。彼は時に原稿を見ないで発言し、そして時にツイッターで呟く。

特異な性格を持つトランプ大統領だけではない。今まで外交手段での解決を重視してきたマティス国防長官もここに来て「北朝鮮は体制の崩壊や人民の破滅につながるようないか

なる行為もやめるべきだ」と述べている。「体制の崩壊」や「人民の破滅」も実に強い言葉だ。対してティラーソンは一貫して「アメリカは北朝鮮の敵ではない」「問題は交渉によって解決されるべきだ」とも述べている。トーンが違うが、これについては「役割分担説」もあれば、「大統領が突出しているだけ」との見方もある。

北朝鮮もアメリカに対する挑発発言をステップアップしている。直近ではグアムの周辺30～40キロを狙って、4発の中距離ミサイルを同時発車する計画を慎重に策定中で、8月の中旬までには指導者である金正恩の最終決定を待つと言っている。まだ言葉の応酬が収まる気配はない。北朝鮮がミサイルのターゲットと発射時期を国民に対して明確にするのは極めて異例で、そこには北朝鮮の「撃ちたい意思」が感じられる。「北朝鮮は長距離を撃って、弾頭の大気圏再突入への耐性実験をしたいのだろう」との見方もある。しかし「グアム」（対北朝鮮でしばしば使われるアンダーセン空軍基地がある）と名指されたアメリカにとっては「喧嘩をうられた状態」と言える。

### 《 unproven leaders 》

マーケットが不安感を強めている二番目の理由は、金正恩という北朝鮮の若き指導者（33才だとみられる）が、指導者になってからは海外に一度も出ず（若い時はスイスに留学したとされるが）、よって海外主要国の要人（大統領や首相クラス）と会談したこともないことだ。言ってみればそもそも「外交」に全く興味がないようにも思える。これは世界各国のトップ（通常は外交にいそしむ）との顕著な違いだ。

北朝鮮の最大の支援国は中国だが、その中国にも行っていないと思われる。つまり友達作りを拒絶し、北朝鮮という国と全く同じように「孤立した男」で、実際の所何を考えているのか分からない。叔父までを公開処刑する残忍さもよく知られている。試されておらず、考え方も分かっていない。その上に国内にも国外にも腹を割って話せる人間がいなくと思われる。要するに「孤立感の強い男」「何をし出すか分からない人物」という側面がある。

このところの北朝鮮サイドの言葉と行動は、完全に話し合いを拒否している。アメリカを直接狙う ICBM（長距離弾道ミサイル 通常は核を搭載）を完成させるまでは一切の話し合いを拒否し、その実現に邁進しているようにも見える。狙っているのは「核保有国」、または「核大国」の認定と、それに相応しい国際的地位（国家としての認定を含む）だと思われる。つまり「脅して認めさせる」というやり方で、今の国際常識からは逸脱している。

北朝鮮は日米韓を威嚇しているだけではない。最近では国連安保理の北朝鮮制裁決議に賛成した中国を連日「裏切り国だ」とか「アメリカの軍門に下った」などと非難、さらには北朝鮮の ICBM と主張する火星 14 号を「中距離弾頭ミサイル」と断じたロシアに対しては「ロシアは本当に目が見えていないのか、でなければ目が見えないふりをしているのか」と言っている。

では北朝鮮のアメリカを狙う核弾頭付き ICBM は完成しているのか。最近のアメリカのインテリジェンス・レポートでは弾頭に装着できる程度の核の小型化には成功したとされ、

「それを最大 60 発もっている」としている。しかしまだ小型化した弾頭の実験を行っていないし、この 60 という数字も「多すぎる」との意見もある。実践配備にもっと重要な「弾頭の 대기圏への再突入技術」（弾頭を 대기圏に再突入する際の高熱から核を守る技術）については、日米韓の政府当局者が先の実験では失敗したとの見方を固めたと伝えられる。

それによると北海道で撮影された直近の 14 号の閃光（せんこう）映像を分析した結果、光点が徐々に暗くなり、海面に到達する前に見えなくなったという。関係筋の一人はそれに関して、「山に遮られたのではなく、弾頭が最終的に消滅した」と語っている。もっとも北朝鮮の技術進展の速さを考慮すると、再突入技術の取得にあまり時間はかからないとも見られるという。

世界も懸念を強めている。ロシアのラブロフ外相はロシアのテレビで、北朝鮮の核開発プログラムを巡り軍事衝突が勃発するリスクは非常に高いとの見解を示し、ロシア政府は米朝間で見られている脅しの応酬について懸念していると述べた。同相は「残念なことに米朝間のレトリックの応酬は限度を超え始めた」と指摘している。但しラブロフ外相は、「北朝鮮を巡る緊張の緩和に向け、ロシアと中国による共同計画がある」と表明した。同相によると「ロシアと中国の計画の下で北朝鮮がミサイル実験を凍結する一方、米国と韓国は大規模軍事訓練を一時停止する」ことを内容とするようだ。しかし北朝鮮が聞く耳を持たず、アメリカが「北朝鮮に核とミサイルを持たせない」という従来の姿勢を取れば、この案そのものが米朝の当事国に受け入れられる情勢にはない。

日本政府は四国 2 県を含む 4 県に空自の地対空誘導弾パトリオット（PAC3）を展開する方針を決めた。北朝鮮がグアムを狙うミサイルを撃つとしたら、日本の島根、広島を経て四国を通過するからだ。アメリカ軍と韓国軍による定例の軍事演習は今月 21 日に迫った。「最後は北朝鮮が折れる」との見方もあるが、世界は 1962 年 10～11 月のキューバ危機以来、最も深刻な核戦争発生の危機に直面しているとも言える。北朝鮮が無茶な野望を捨てて折れることが最善の形だが、それを望めるだろうか。

### 《 we're doing everything.... 》

危険な言葉が飛び交う一方で、「実は事態はそんなに緊迫していないのではないか」とも思える客観的証拠もある。例えば韓国に駐留している何万というアメリカ兵とその軍属（家族を含む）が大規模に移動しているという報道は入っていない。韓国の外務大臣は今「夏休み中」とのことだし、トランプ大統領もいろいろ述べてはいるが、「ホワイトハウスで指揮」というわけではなく、ニュージャージーの自分のゴルフ場で夏休み中だ。

またこの週末には第 19 代アメリカ統合参謀本部議長であるジョー・ダンフォード（Joseph Francis Dunford, Jr.）が韓国を夫人同伴で訪れており、米朝軍事対立が直ぐに迫っているという印象もない。彼は現在の情勢に関連して「As a military leader, I have to make sure that the president does have viable military options in the event that the diplomatic and economic pressurization campaign fails」としながらも、「Even as we

develop those options, we are mindful of the consequences of executing those options, and that makes us have more of a sense of urgency to make sure that we're doing everything we absolutely can to support Secretary Tillerson's current path」とも述べている。

つまり軍事オプションは作成しているが、「それらを実行したときの（悲惨な）結果を知っているだけに、ティラーソン国務長官の外交努力実現への助力を惜しまない」と述べて、軍事オプションの実施を直近ではなく、やや先に置いている印象を残した。彼は中国に行った後、日本に立ち寄る予定である。

- - - - -

ではなぜトランプ大統領は世界中の指導者を不安にさせる過激な言葉を使うのか。「交渉の冒頭では徹底的に敵をたたくという彼のビジネス手法」という見方もあれば、「これといった成果のない大統領 200 日を覆い隠すために、北朝鮮というターゲットを使っている」との見方もある。トランプの言葉と、実際の米軍などの動きの乖離はいずれにせよ大きい。

しかし一つ確実なことがある。それは北朝鮮の核・ミサイル技術が確実に進展し、アメリカを敵視し、アメリカを脅す指導者を北朝鮮が抱き続ける中では、いつかの時点でアメリカが今の北朝鮮の体制を除去するために動き出すことは確実だ、ということだ。それにはやや時間がかかるかもしれない。しかし北朝鮮の核・ミサイル技術の進歩の早さはアメリカの当局者も驚いている。アメリカという国は、イギリスとの戦争に勝って独立した経緯があり、「自らを脅かす敵」は必ず叩きに動くと考えるのが自然だ。座視はしない。それがレジーム・チェンジになるのか戦争になるのかは分からないが、今のままだと時は刻まれていると考えるのが自然だ。それは大統領がトランプであるかどうかとは関係ない。

危機の終わり方には今のところ二つぐらいが考えられる。米朝両方が同時に折れると言うことはまずないだろう。可能性が高いのは「片方が折れる」か「結局最終ゲームに進む」だ。筆者がテレビなどに出て議論する軍事評論家の中では、「最後は北朝鮮が折れる」との見通しの人が多い。なぜなら「体制維持」が狙いの北朝鮮にとって、アメリカとの最終的対決は得るものがないからだ。北朝鮮の体制はもたない。今の両国の軍事力の差から見れば、韓国が被る被害などを考慮しなければ、アメリカの北朝鮮制御は比較的短時間で可能だ。

「最終ゲーム」とは要するに戦争（核を巻き込む可能性がある）だから、避ける必要があるが、その中でもいろいろなパターンが考えられる。通常兵器の打ち合いで終わるケース、核が何らかの形で使われるケース。戦争後の北朝鮮の形にもいろいろなケースが考えられる。韓国軍が北上するケース、中国軍が北から北朝鮮に入るケース。多分アメリカが北朝鮮を攻撃するとしたら、「中国との何らかの合意」が必要だろう。

本当に米朝対立が抜き差しならぬ形になったときには、恐らく中国とロシアが動く。両国は北朝鮮と国境を接し、かつての友好国だ。難民の流入など米露にとっても北朝鮮情勢の不安定化は懸念材料だ。ラブロフ外相は先に触れたように中露の提案の可能性に触れた。それ故に 108 円台に先週末に入っていたドル・円相場は引けでは 109 円台に戻った。しかし

先に紹介した提案には、恐らく米韓が「ノー」と言うだろう。米韓合同軍事演習は 21 日から開始の予定だ。

繰り返すが今回の危機の大きな不安要素は主役二人共が予測不可能性を存分に持っているという点であり、今後も程度の差こそあれマーケットへの影響は続くと思われる。

- - - - -

今週の主な予定は以下の通り。

08月14日（月曜日）	4～6月期 GDP 中国7月鉱工業生産 中国7月小売売上高 中国7月都市部固定資産投資 インド7月消費者物価指数 休場=タイ
08月15日（火曜日）	6月鉱工業生産指数確報 7月首都圏新規マンション発売 米7月輸出入物価 米8月NY連銀製造業景気指数 米7月小売売上高 米8月NAHB住宅市場指数 米6月企業在庫 米6月対米証券投資 休場=韓国、インド、イタリア
08月16日（水曜日）	対外・対内証券売買契約・週間 7月訪日外国人数 石油製品価格調査 米7月住宅着工件数 米7月建設許可件数 米7月25・26日開催のFOMC議事録 NAFTA再交渉の初会合(~20ワシントン)
08月17日（木曜日）	7月貿易統計 米8月フィラデルフィア連銀製造業景況感指数 米7月鉱工業生産・設備稼働率 米7月CB景気先行総合指数
08月18日（金曜日）	米8月ミシガン大学消費者マインド指数

《 have a nice week 》

週末というか、ちょっと長いお盆休みはいかがですか。というのは現在進行形の方も多い

と思うので。今週は北朝鮮情勢が大きな焦点になりそうなので、その問題を中心に書いてみました。それにしても今日が 14 日で、昔で言えばお盆の最中。なので道路は上りが渋滞したり、下りが渋滞したりと車の動きが複雑になっている。「いかに渋滞につかまらないか」がここ数日のポイントです。

それはそうと、今朝はやはりテレビにかじりつきました。全米プロの松山英樹選手は残念でした。最終日も良く頑張ったのですが、最後は届かず。「いつ勝ってもおかしくない」と言われていて、いつかは勝つでしょうが、本当は今朝見たかった。

来週は私が夏休みをいただくために、このニュースはお休みです。皆様には良い夏の季節をお過ごし下さい。

《当「ニュース」は三井住友トラスト基礎研究所主席研究員の伊藤(E-mail [ycaster@gol.com](mailto:ycaster@gol.com))の相場見解を記したものであり、三井住友信託銀行の見通しとは必ずしも一致しません。本ニュースのデータは各種の情報源から入手したのですが、正確性、完全性を全面的に保証するものではありません。また、作成時点で入手可能なデータに基づき経済・金融情報を提供するものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。投資に関する最終決定はお客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。》